



WE, JOKERS 英語のジョークを楽しむ会会報

No.47 February 10, 2015

初笑いショート・スピーチ SUPPLEMENT

1月17日 [土] 午後、銀座ライオン渋谷マークシティ店で開催された、2015年新年懇親会の第三部「初笑いショート・スピーチ」を発言者の手によって再現したものです。新堂睦子MCに締め括りの総評を頂きました。

相原 悦夫

1. Wish Come True

A couple comes upon a wishing well.

The guy leans over, makes a wish and throws in a coin.

His wife decides to make a wish too, but she leans over too far and falls into the well.

The guy says: "Wow, it really works."

2. Passing Test

A teacher, a thief and a lawyer all die in the same freak accident.

When they reach the Pearly Gates, St Peter tells them that they each have to answer a question correctly in order to enter.

The teacher is first, and St Peter asks:

"Name the famous ship that was sunk by an iceberg."

"Phew, that's easy," says

the teacher, "the Titanic"

"You may pass," says St Peter.

It's the thief's turn.

"How many died on the Titanic?"

The thief replies: "That's a toughy, but fortunately I just saw the movie. The answer is 1500 people." And so he gets in.



St Peter then tells the lawyer: "Now, name them."

安藤 雅彦

米国議会で、政敵のA氏とB氏が議場の入り口で出会う。A氏がB氏の禿げ頭に手をやり、「まるでうちの女房の尻みたいな手触りだぜ」とからかった。するとB氏が自身の禿げ頭をさわって、「そういや、確かにそっくりだ」



今井 真由美

上から読んでも下から読んでも I am Imai の今井です。今年も学習者の面白ネタをひとつ。

1. レストランで Please give me the bill を「KANOJO をくださいーい」。ご丁寧にも「いくらですか?」と続けちゃったそうで。

OKANJO=bill KANOJO=her

2. 製薬会社の生徒: 「ああ 日本語って深い」と妙に納得。

「クスリ = medicine の反対はリスクなんだねえ!!!」 だって。

お粗末!!

植田 良明

これは産経新聞の小コラムより。

It was on the subway station in Seoul when the

reporter noticed two unusual looking young women chatting in Chinese.

Their faces were covered by bandages and adhesive plasters all over their faces. They should have had the operation of cosmetic surgery.

It is common among Chinese university students to have such operation before they take a job interview.

The problem arose when they were leaving from Korea. Their exit permits were suspended, because passport controller could not identify them as the right passport holders.



岡田 茂富

私、岡田茂富のショート・スピーチは下記のようにありました。・・・・

今年は例年と違ってこの私は、お正月よりすこしおかしいといおうか、おめでたいところがあるようです。

お正月の4日だと思のですが、NHKのBS放送でボルドーのシャトーめぐりの番組で、いいワインはいい葡萄の木からできる、ボルドーはジロンド河畔の小石や砂利の多い土壌の畑が多く、葡萄の木はひどく苦しみながら成長する、と言っているのにすっかり感心しました。

さらに、産経新聞の連載「鈍機翁のためいき」年頭所感に、「狂気の原因は神秘の破壊」と題して、チェスタートンの「正統とは何か」から、人間を正気に保ってきたものは神秘主義である、ということを紹介していました。

そして本日1月17日、同じく産経新聞に、哲学者適菜収が「賢者に



学ぶ」と題する欄にマイケル・ポランニーの「暗黙知」に触れ、説明不可能な個人的な知識要素をすべて駆除し、理性や明示的なもののみを信仰する近代科学の理想を追求することから、新しい形の狂信である共産主義・全体主義が発生した、と説いていました。

なんだかおかしいですね。これ、年頭のジョークですけど。

小澤 正樹

『皆さん、こんにちは、そしてあけましておめでとうございます。』

僕はこの3月で定年退職となります。その後も講師をする予定なので完全退職ではありませんが、今からあれをやろう、これをしようと胸算用中。ピアノを習い直そうとか、岐阜の山奥に友人と共同で作った天体観測所に通おうとか、未だ見たことのないオーロラ観測に行こうとか、夢は尽きない。



その中で一番実現が難しそうなのが、妻と同じ時間を過ごすことです。妻とは同じ歳、同じ職業なのですが、趣味が全く重ならない。たまに一緒に街に出かけても、集合時間を決めてそれまで単独行動をとる始末。時々目にする仲睦まじげなご夫婦にちょっと憧れています。

そこで思いついたのが「楽しむ会」の先輩諸氏。人生経験豊かな皆さんから有益なヒントが得られるのでは、と今日のはるばるやってきたわけです。

ところが今日、年間表彰を受けた作品を見て考えが変わりました。植田さん、相原さん、笠井さん、熊崎さん、どの作も *henpecked* どころか *cowkicked* とも言いたくなる涙ぐましい作品ばかり。

皆さん、苦勞してらっしゃるんですね。夫婦円満の秘訣をお尋ねするのはやめました。これからは *wife's silence* にも強い心で耐えていこうと思います。今年もよろしく願いいたします。』

草野 淳

遠く離れて暮している恋仲のカップルにはクリスマスのデートもままならず、彼は彼女に手袋を贈ってあげよ



うと思った。女物の買いものに自信のない彼は、妹を連れてデパートへ。妹はついでに仲良しの女友達に可愛いパンティーを色違いのペアでプレゼントすることにした。

ところが店員の包装ミスで、彼が買って帰って彼女の元へ熱いラブレターを入れて発送した中味が、手袋ではなくそのパンティーだったから、贈った彼も、受け取った彼女も、気まずいやら恥ずかしいやら。

さて、彼女への思いを込めた彼氏の手紙の内容は「君はデートのときいつも you were in the habit of not wearing any. 」というずばりの書き出し。

「ぼくはおとなしい長めのものを選んだのに、妹のやつが、短いのにしなさいって。It's easier to pull off と言うもんだから」

「店員の女性も横でこう言うんだ。私も愛用していません。汚れにくい布地で、3週間使っていても hasn't had to wash だったわ」

「本当は君に会って、じかに I wanna put'em on for you なんだけど、残念だよ。心配なんだ No doubt many hands will touch them before I have the chance to see you again.」

「でも想像すると、うれしくてドキドキしちゃうな。I just think how many times I'll be holding them in my hand over the coming year!」「I hope you'll wear them for me Friday night. With all my love.」

おまけに、こんな追伸まで書いてしまった。

「The latest style is to wear them folded down, with a little fur showing. 」だってさ。

熊崎 清子

Two poisonous snakes were talking.
Suddenly one of them said to the other,
'By the way, are we poisonous, aren't we?'
'Yes, why?'
'Well, I've just bitten my tongue. What shall I do?'



小池 温

西洋と日本の文化の違い

パリでのテロリストの新聞社襲撃殺傷事件報道をみて、西洋と日本との文化の違いを痛感した。亡くなった記者を悼み悪に屈しないと“Je suis Charlie” (I am Charlie. 私はシャルリ) と書かれたプラカードを多くのフランス人が掲げて行進した。日本で仮にNHKが襲撃された時、市民が「私はNHK」のプラカードを掲げることはないと思う。

新聞・雑誌の政治風刺画は日本では稀にしか掲載されないが、“Charlie Hebdo”紙は政治風刺の専門紙



である。私は1970年にフランス語圏のBeirut勤務となったが、この年に“Harakiri”紙が“Charlie Hebdo”紙に名前が変わったとフランス語個人教師が教えてくれたことを憶えている。“Harakiri”は日本語の「腹切り＝切腹」で、あまりに過激で評判が悪かったので、当時米国で人気が出ていた“Peanuts” (Snoopy) に出てくる腕白坊や Charlie Brown の Charlie を借用し、紙名を“Charlie Hebdo”に変え、“Peanuts”の掲載も始めた (Hebdo は、Hebdomadaire (週刊) の略語)。

この新聞 (毎5万部) は、残念ながら日本では売っ

ていないが、やや紙面が穏やかな 政治風刺紙 Canard Enchaîné 紙 (40 万部週刊) は飯田橋の本屋で手に入る。1 月 7 日号の僅か 8 ページの紙面に、オランド大統領の諷刺画がなんと 11 枚も掲載されている。フランス政府はいちいち相手にしないようで、この辺りも日本とは対応が異なるのではないかと。

佐川 光徳

ウロボロスの蛇

英国の現代作家 David Lodge が、Henry James (1843-1916) の晩年を描いた小説 *Author, Author* (2004, Viking) 『作者を出せ!』の巻頭にある、二つの互いに矛盾した断り書きをご紹介します。

Publisher's Note

This is a work of fiction. Names, characters, places, and incidents either are the product of the author's imagination or are used fictitiously, and any resemblance to actual persons, living or dead, business establishments, events, or locales is entirely coincidental.

Author's Note

Sometimes it seems advisable to preface a novel with a note saying that the story and the characters are entirely fictitious, or words to that effect. On this occasion a different authorial statement seems called for. Nearly everything that happens in this story is based on factual sources....



私はこれを読んで、「ウロボロスの蛇」のことを思い浮かべました。

新堂 睦子

THE LAWYER & THE LITTLE BOY

A lawyer is trying to call his clients. The phone rings and their little boy, in a whisper, says,

“Hello.”

Lawyer: “Is your mommy there?”

Boy: (whisper) “Yes.”

Lawyer: “Can I speak with her?”

Boy: (whisper) “She’s busy.”

Lawyer: “Is your daddy there?”

Boy: (whisper) “Yes.”

Lawyer: “Can I speak with him?”

Boy: (whisper) “He’s busy.”

Lawyer: “Is there anyone else there?”

Boy: (whisper) “The fire department.”

Lawyer: “Can I talk to one of them?”

Boy: (whisper) “They’re busy.”

Lawyer: “Is there anybody

ELSE there?”

Boy: (whisper) “The police

department.”

Lawyer: “Well, can I talk to one of THEM?”

Boy: (whisper) “They’re busy.”

Lawyer: “Let me get this straight, your mother, father, the fire department AND the police department are ALL in your house, and they’re ALL busy. WHAT are they doing?”

Boy: (whisper) “They’re looking for me.”



棚橋 征一

1. 遙か昔にラジオで聞いたジョークのため、記憶が不確かですが、下記の会話を紹介させて頂きました。

Father and son were walking along a cemetery.

Son: Dad, why do they put fences all around the cemetery?

Dad: Because they’re dying to enter it.



2. 言い忘れたことも付記して宜しいそうなので、かつて米国子会社に出向中に聞いた、身につまされる駐

在員仲間の体験談も紹介させていただきます。英語のジョークでなくて、すみません。

夏休みの家族サービスで、日本企業の駐在員パパが張り切ってドライブし、東海岸の風光明媚なマリナー地区のホテルに到着しました。人気のレストランでディナーを楽しんだ後、ホテルへ戻り、全員ベッドに入った。ところが部屋のすぐ下がホールのように、結婚式の披露宴が続いているのか、楽団の音などがうるさくて寝つけない。ママも子供もパパのほうを見て、「ねえ、もう 12 時を過ぎてるよ。フロントに電話して、もっと静かにするようにいってよ」と頼みました。ここは自分がガンバルしかないと、やおら受話器をもちあげたパパ、フロントに番号をかけ、相手が出るのを待った。「一体いま何時だと思ってるんだ！こんなうるさくちゃ、眠れないじゃないか！」とたたみかける積りだった。フロントが出て、「What can I do for you?」と訊いた。そこで、語気を強め（た積りで）、「What time is it now, do you think?」とぶちかました。相手からは、「Well, sir. It's about 12:30.」との返事。すると、悲しいかな、殆ど自動的に、「Oh, thank you.」と言ったまま、受話器を置いてしまった。あっ、文句を言うんだったと思ったが、後の祭り。一晩中、自己嫌悪で眠れないソパでした。

田村 公雄

My antiaging dream

I am a crazy wine lover. That is because I was in business to trade with European countries for 50 years. Naturally I could have good opportunities to enjoy European wines. I have a big wine cellar in my house which can store 200 bottles. The cellar is always full. I call the cellar *Ohoku*, because it is the exciting moment to choose the most tasty looking one in



every evening.

At the bottom of the cellar, there is a small section for 7 bottles. It is for my 7 grandchildren's birth year wines. It is my dream to drink the wine when each grandchild becomes 20 years old. Actually, there are only 6 bottles in the section at present, because the eldest grandson became 20 years old last year. It was the most touching and exciting instance to drink together with my loving grandson.

After finishing 7 wines with all my grandchildren, my next target will be to celebrate the wedding of all grandchildren and then to celebrate the birth of great grand-children. I have my life plan up to 150 years old. Thank you for listening to my moderate tiny dream.

中嶋 秀隆

正月に4才の孫に聞かれました。

「おじいちゃん。歳を重ねると、どんなことが起きるの?」

私は答えました。

「3つのことが起きるよ。」

第1に、代謝が緩やかになるのぶん、身体に脂肪が付きやすくなる。

第2に、記憶力が低下するぶん、物忘れがひどくなる。

第3に、・・・あれ、何の話しをしてたんだっけ?」



服部 陽一

今、サッカーアジアカップ大会が行われていますが、サッカーは世界のどこでも行われていて、すべてのスポーツのうち、その人口の多さはサッカーくじ参加者を含めると断然世界一です。そんなサッカーについて三つのお話をしたいと思います。

1. 現役のサッカー選手が天国に行った先輩に電話を

して、天国でのサッカー事情を聞きました。その返事は、「天国でもサッカーは盛んだよ。明日も試合があるんだ。そう云えば、明日の相手チームのスタメンに、お前の名前が載ってたぞ」

2. 天国と地獄のサッカー代表チームが試合をする事になりました。

両チームの監督の試合前の弁；天国チームの監督「そりゃー天国の勝ちに決まっているさ。何せ歴代の素晴らしい選手たちはみんな天国に来てるんだからな」。地獄チームの監督「そうは行かないよ。何せ審判はみんな地獄に来ているんだからな」

3. サッカーくじをいつも買っている 86 歳のおばあさんが 28 億円の賞金を当てました。先にそれに気付いた孫が、おばあさんにいきなりそのことを言うと心臓が危ないので、家族と相談して主治医からおばあさんの体を考慮しながら言ってもらうことにしました。主治医は、「そういうことは私の得意とするところで。すぐに参ります」と言って、やって来ました。主治医とおばあさんの会話は；

主治医「おばあさん、人生には良いことや悪いことが色々起るものです。何があっても落ち着いて対処しなければいけませんよ。例えば、もしサッカーくじで 28 億円という大金が当たったら、どうしますか？」
おばあさん「そうしたら、半分あなたに上げるわよ」
主治医は心臓麻痺で死にました。

舟崎 正敏

メキシコの joke を一つ。

ある男が牧師から馬を買った。牧師からこの馬は「アベマリア」と言うと走り、「アーメン」と言うと停まると言われた。

乗ってみるとさすがは牧師の馬で、鞭を入れてもなにをしても動かないが、「アベマリア」と言ったら走り出した。

軽快な走りの良い買い物だったと喜んだが、そのうち馬は山に向かってどんどん登り出した。この道は行

き止まりで先は崖。この馬を止めようとしたが、何と言えど停まるのか忘れてしまった。馬はたづなをひっぱろうとなにをしようと思っても停まってくれない。

崖が迫りもうダメと観念し「アーメン」と言ったところ、馬は崖の寸前で停まった。

あの牧師は「アーメン」と言えば停まるといったことを思い出し、目の前の深い崖をみて冷や汗が流れた。

彼は助かったと喜び、「アベマリア」と言った。

MC の記——新堂睦子

ジョークのエッセンスのオンパレードですね。家庭の事情がしのばれ、口もとがほころぶ話、self-deprecating なジョーク、哲学論、文化論に至るもの、obscene な語彙無しに、イメージーションをくすぐる話、ごろ合わせ・・・さすが百戦錬磨のみな様のプレゼンテーションでした。

「初笑いショート・スピーチ」では私見をおゆるしいただければ、私は **Ouroboros**、ここでは **cyclicity** 終わりなき循環、つまり、出版社と作家のぐるぐる回り、がとても面白く思われました。

また小池さんの時宜を得た、フランステロ事件の発端となった **Charlie Hebdo** の前身は **Hara-Kiri** であったこと、**Charlie** は、人気コミック **Peanuts** (**Charles M. Schulz**) に登場する **Charlie Brown** に由来する、と解説なさいましたが、**JLC** の高い知性がたくまず顕われていると感じ入りました。

Pearly Gates の門番、**St. Peter** も気苦労が絶えませんね。



笑う門には福来たる。本年もよき年でありますよう。